

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：32696

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K12315

研究課題名（和文）急性期を脱した脳卒中患者の家族が抱く不確かさへの介入戦略

研究課題名（英文）Intervention strategies for the uncertainty of the families of stroke patients who have passed the acute stage

研究代表者

飯塚 麻紀 (Iitsuka, Maki)

駒沢女子大学・看護学部・准教授

研究者番号：10319155

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、急性期を脱した脳卒中患者の家族を対象に、病気に関する不確かさを緩和する看護師の関わり方を検証することである。

第1段階研究では、家族を対象とした質的研究によって、家族が信頼する看護師の関わり方を抽出した。その後、専門家7名の協力を得て、家族に使用可能な質問紙を作成した。第2段階研究では、作成した質問紙と病気に関する不確かさ尺度を使用した量的研究を行い、看護師への信頼と不確かさとの検証を行っている。第2段階研究は、研究代表者の休職やコロナ禍におけるデータ収集困難により、現在も続行中である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、これまで重症救急もしくは退院時の支援に関心が注がれてきた脳卒中患者の家族研究について、「不確かさ」が高くなる急性期を脱した時期に焦点を当てることに特徴がある。また、「不確かさ」という視点から家族支援の在り方を明確にしようとする試みである。

脳卒中患者の家族に対する効果的な看護支援を検討することは、家族が二次的な健康被害を引き起こさないようにするうえで非常に重要な意味を持つ。これにより看護師の家族支援の質の向上につながるものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to examine how nurses interact with family members of stroke patients who have passed the acute stage in order to alleviate the uncertainty of their illness.

In the first stage research, a qualitative study targeting families extracted the relationship of nurses trusted by families. After that, with the cooperation of seven specialists, we created a questionnaire that can be used by families. In the second stage research, we conducted a quantitative study using the created questionnaire and the uncertainty scale for diseases, and verified the trust in nurses and uncertainty. The second stage research is still ongoing due to the research representative's leave of absence and data collection difficulties due to the corona crisis.

研究分野：Nursing

キーワード：脳卒中 家族 不確かさ 看護介入

1. 研究開始当初の背景

家族の一員が生命の危機あるいは後遺症を残すような疾患に罹患した場合、そこから生じうる問題の影響は、家族の日常性に対する大きな脅威となる。脳卒中患者の家族を対象に行った研究では、家族は、患者の発症の衝撃、生命の危機とそれを脱したことへの安堵、障害回復への疑問と期待、今後の生活に対する見通しの悪さなどを体験し、変化した患者の存在に戸惑いつつも生活に折り合いをつけることが明らかにされている。即ち患者の家族は、病気という対象そのものの存在は認識しているものの、その内容は漠然として明確化できないものであり、その時起きている状況を整理できない認知状態にある。一言で表せば、家族は『不確かさ』の過程を体験しているといえる。

不確かさについては、1988年に米国の Merle H Mishel が、「病気に関する不確かさ理論」を発表し、(a)病状に関する曖昧さ、(b)治療やケアシステムの複雑さ、(c)病気の診断や重症度についての情報の不足や不一致、(d)病気の進行や予後の予測不可能性、を含むものだと説明している。この理論は看護の世界で広く活用され、現在、不確かさは患者だけでなくその家族にも生じるものであり、不確かさが高いほど、不安や抑うつは高く、QOL や Well-being は低くなることが明らかになっている。尚、不確かさの測定尺度は、対象別に4種類が開発され、そのうちの一つに家族用尺度が1997年に開発されている。

この背景のもとで申請者は、家族が二次的な健康障害を起こさないよう、不確かさの要因を探り、不確かさを緩和させるための看護支援の方法を明らかにすることが重要であると考えた。この信念の下、米国で開発された患者家族用の不確かさの測定法「Managing Uncertainty in illness Scale-Family Member Form (病気に関する不確かさ尺度-家族用)」を日本語に初めて翻訳して日本語版 MUIS-FM を作成し、その信頼性と妥当性を2014年に実証した。その調査の中で、非常に興味深いことに、脳神経疾患の中でも脳卒中の家族の不確かさが高いという特徴を発見し、さらに入院2日目に最も高く、その後一旦低くなるものの14日以降に再び上昇するという新規の結果が提示された。そこで申請者はさらに、この尺度を用いた横断的調査を行い、急性期を脱した脳卒中患者の家族は、患者が寝たきりの場合よりも、意識レベルや生活動作の支障がある程度軽症の場合の方が、家族の不確かさは高くなることを明らかにした。

2. 研究の目的

急性期を脱した脳卒中患者の家族が、患者の病気に関する不確かさを緩和するために効果的な看護師の関わりを検証すること。

用語の操作的定義 本研究では、「家族」を、戸籍上の関係及び同居の有無を問わず、患者の面会に訪れた者のうち、その人本人が患者の家族であると認識するものと定義する。

3. 研究の方法

本研究は、質的調査・量的調査を用いた横断的研究デザインである。

具体的には【研究1】として、急性期を脱し入院中の脳卒中患者10名を対象にインタビューを行い、不確かさ(病状に関する曖昧さ、治療やケアシステムの複雑さ、病気の診断や重症度についての情報の不足や不一致、病気の進行や予後の予測不可能性治療や入院生活)を緩和する看護師の関わりを抽出する。その後【研究2】として、日本語版 MUIS-FM を用いた質問紙を用い、インタビューから明らかになった看護師の関わりと不確かさとの関連を検証する。

4. 研究成果

【研究1】急性期を脱した脳卒中患者の家族は、看護師のどのような関わり方に信頼を抱くのか

1) 研究対象者の概要

研究協力者となった脳卒中患者および家族の属性を示す。対象者は5名、年齢は40歳代から70歳代、女性が4名で、患者との関係は配偶者4名、子1名であった。

患者の性別は男性3名、手術経験はありが3名、入院日数は16-79日で、重症度を示す日本語版 modified Rankin Scale (mRS) は3-5で、全員ICUから一般病床への転棟の経験があった。

2) 脳卒中患者の家族が看護師に対して抱く信頼

データからは49コード、31の統一コードが抽出され、9のサブカテゴリーと3つのカテゴリーが生成された。以下3つのカテゴリーについて説明する。

患者の生命と尊厳の保持：家族は、看護師が患者の 細やかな観察 と 患者の尊厳を保つ ケア を行ながら、家族が頼まなくても適切なタイミングで必要なケアや処置をしてくれる など 看護師役割の遂行 することで 患者の生命と尊厳の保持 してくれることに信頼を抱いていた。

現状理解のためのサポート：家族は、自分からはなかなか聞くことのできない 患者状態の積極的な説明 と 病棟移動に伴う情報の提供 を看護師に期待していた。また 家族が行えるケアの促し を行ってもらうことで患者の現状を理解することができ、そのような看護師の関わりに信頼を抱いていた。

パートナーシップ：家族は患者の治療の決定に迷うことも多く、 家族の想いや意思決定の尊重 してくれることを看護師に期待するとともに、 患者の回復をともに喜ぶ 看護師の姿勢や、看護師の落ち着いた対応など 家族への配慮 のある関りに信頼を抱いていた。

【研究 1-2】質問紙の作成

本来であれば、研究 1 の結果を基に質問項目を作成し、「不確かさ」との関連検証を行う予定であった。しかし、対象者が 5 名と少数であったことから、さらに信頼性のある質問項目とするために、文献レビューと、専門家による内容妥当性の調査を追加した。結果、3 カテゴリーはそのままに、各項目に付随する質問項目を 20 項目から 14 項目に修正し、一部設問の表現を修正し質問紙として洗練させた（表 1）。

表 1. 「脳卒中患者の家族が看護師に抱く信頼」質問項目

カテゴリー 1：後遺症のある患者の尊厳の保持

1	患者の意思や希望をくみ取ろうとしてくれる
2	患者に対し、自分がされて不快なケアはしない
3	患者に対し、他の患者と同じように声掛けしてくれる
4	患者の身だしなみをきれいに整えてくれる
5	患者の排泄のケアを丁寧に行ってくれる

カテゴリー 2. 現状理解のためのサポート

1	家族に、患者の良い情報だけでなく、悪い情報も伝えてくれる
2	家族に、面会時間外の患者の様子や変化を伝えてくれる
3	家族に、患者自身ができることとできないことを教えてくれる
4	家族が患者のためにできることを教えてくれる

カテゴリー 3. パートナーシップ

1	家族が選択した治療や処置を尊重してくれる
2	家族が気づいた患者の変化を受け止めてくれる
3	患者の回復をともに喜んでくれる
4	家族が気持ちや疑問を話しやすい雰囲気ですべて接してくれる
5	家族が大切にしていきたいことを確認してくれる

【研究 2】脳卒中患者の家族が抱く看護師への信頼と不確かさとの関連検証

回復期リハビリ病院に入院中の患者の家族 210 名を対象に質問紙調査を計画した。本研究の概念枠組みを以下に示す。本調査では「家族が看護師に対して抱く信頼」と「不確かさ」には負の相関関係があるという仮説を立てている。また、研究 1 で作成した「家族が看護師に対して抱く信頼」の質問紙の信頼性と妥当性を検証することも副次的目的としている。なお、本調査はコロナ禍の影響を受け、2023 年 6 月現在もデータ収集を継続している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 飯塚麻紀、横田益美、土屋陽子	4. 巻 3
2. 論文標題 急性期脳卒中患者の家族を対象とした研究の現状と家族を捉える視点	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 駒沢女子大学研究紀要【人間健康学部・看護学部編】	6. 最初と最後の頁 41-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 飯塚麻紀、横田益美、土屋陽子
2. 発表標題 急性期脳卒中患者の家族を対象とした研究の現状と課題
3. 学会等名 第39回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Maki iitsuka, Yoko Tuchiya
2. 発表標題 What Families of Patients Who Survived Acute Phase Of Stroke Think About Nurse
3. 学会等名 22nd East Asian Forum of Nursing Scholars (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 飯塚麻紀、土屋陽子
2. 発表標題 急性期を脱した脳卒中患者の家族が抱く不確かさの内容
3. 学会等名 第38回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 飯塚麻紀、土屋陽子
2. 発表標題 脳卒中患者の家族が信頼を抱く看護師の関わり
3. 学会等名 第42回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	土屋 陽子 (Yoko Tsuchiya) (90637414)	順天堂大学・保健看護学部・講師 (32620)	
研究分担者	横田 益美 (Masumi Yokota) (70827047)	駒沢女子大学・看護学部・助教 (32696)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------